

(平 三十一 国発後)

小論文

- ・問題は1～10ページである。
- ・下書き用紙は中に2枚入っている。

注意 解答は答案用紙に縦書きで記入しなさい。

小論文 二五〇点

次の文章を読んで、あとの問一〜四に答えなさい。

経済のグローバル化は時間の均質化に一役買っている。

たとえ日本が夜であっても、地球の反対側は日中であり、様々な経済活動が行なわれている。世界のどこかでは株や為替の市場が開いており、日本国内からも参加することができる。株や為替の市場に関わる仕事をしている人たちは、様々なアンテナを張り、情報を収集している。また、場合によっては、情報を収集するだけではなく、直接的、間接的に海外の市場での売買に関わることもある。

様々な市場からの情報を収集し、さらにそれらの市場に介入することが可能になっている以上、それに関連する経済活動も24時間いつでも行なわれ得る。実際、そのような活動に関連している人は少なくない。そうした人たちにとっては、それが自らの選択によって行なっている場合でも、会社のような外部から強いられる場合でも、生活の場における朝や昼、夜といった時間帯は、もはやその固有の意味を失っていることだろう。

海外の事業に関わると、どうしても実際に住んでいる土地の時間における活動パターンとは、異なる時間パターンでの活動を行なわざるを得ない局面が出てくる。経済活動のグローバル化は、個々人における時間の均質化を推し進める機能を果たしている。

経済活動のグローバル化がますます進展しつつある現在、時間の均質化を求めるような社会的圧力は、日本だけの問題ではない。デパートのような大型店舗ならば、一般消費者が労働から離れている週末に店を開けることは、利益の追求において少なからず利点がある。また、経済がグローバル化している以上、やがては世界中が、欲求や利便性の追求優先、経済活動優先で、昼や夜、曜日や特別な日といった時間の分節や特異性を失うことになるのかもしれない。実際、インターネットや放送を通して地球上の他のエリアと情報をやり取りするようになると、その土地における時間の特異性(時刻、昼夜、曜日、節気など)も失われるようになるだろう。

経済的なグローバル化が進む現在、生活上の様々な場面において、人間の欲求が時間の特異点を次第に覆い隠しつつあるように見える。抽象的な、特異点をもたない、均一な時間へと変化させつつある。

このような均一な時間、いつでも欲求が満たされる（もちろん、お金さえあればという条件付きではあるが）時間とは、常に欲求を満たすことができるという点で、一見豊かな時間のように思える。しかし、特異な点をもたない日々や、均一な時間を生きるということは、はたして本当に豊かなことなのだろうか。

技術の発展は、私たちの生活における時間を、より厳密に規定し、移動や情報の伝達を高速化した。それによって、様々な事柄の利便性が獲得されたのは事実だろう。また、このような技術を発展させる背景に、それを望む私たち自身の要求があったということは否定できない。

しかし、このように厳密な時間を誰もが参照できる社会や、移動や情報の伝達が高速化された社会は、人類の長い歴史では、つい最近になって獲得されたばかりの特殊な状態である点を忘れてはならない。

誰もが参照できるような公共の時間、人類史上特殊な現代社会における時間的特徴は、人間の時間的制約からみた場合、様々な問題があるように思えるのだ。

時間に対して厳密に行動するということ、つまり、あらかじめ決められた時間の通りに行動することは、人間にとってはかなりの難しい課題である。

人間が体験する時間は、様々な要因によって変化する。したがって、時計のように均一の時間を刻む道具がなければ、あらかじめ設定された時間の通りに行動することは、個人としてはかなり困難である。しかも、たとえ時計があったとしても、時間経過への注意自体が時間の過大視を引き起こしてしまうから厄介だ。

たとえばスケジュールがしつかり決めてあったとしても、人間が特定の時間の中でできる事柄には、数的な限界があることも忘れ

てはならない。健康なときには特定の時間内にできる事柄が、疲れていると長い時間がかかる。また、課題が多くの認知的負荷をもたらす場合ほど、その遂行には、より多くの時間を要する。やらなければいけない事柄の数が一緒だとしても、それが難しければ、当然それをやり遂げるためには必要になる時間が増えてくる。

こうした人間の時間的特性を考慮すると、限られた時間の中に色々な作業を詰め込んであるようなぎりぎりの行動計画は、作業者にとってはかなり無理があるものと考えられる。

2005年4月25日に起きた、JR西日本の福知山線の事故では、大変痛ましいことに107人が命を落とした。この事故では、発生当初から秒刻みのスケジュールが問題視されていた。2007年6月に発表された最終報告書では、直前に引き起こしたオーバーランに対する処分を恐れた運転士が車掌の無線交信に気をとられ、運転から注意がそれ、急ブレーキのタイミングが遅れたことが主な事故の原因とされている。

注意がそらされた場合には認知的処理が遅くなり、反応時間が遅くなる。最終報告書が指摘したように、運転から注意がそれたことが事故の直接的原因だったのかもしれない。しかし、そもそも秒刻みのスケジュールの設定自体が、人間の能力を超えていたとは考えられないだろうか。

秒単位でのスケジュール設定は、人間の能力の過大評価に基づいていると思われる。そこまで厳密なスケジュールに従うことは、多くの人間にとってはかなり無理があるからだ。電車の運転士はプロフェッショナルとしてのトレーニングを積んでいるだろうが、それでも秒単位でのスケジュールに対応するのは、たいていの人間の能力を超えているように思われる。

厳密なスケジュールからずれることが許されないようなシステム、あるいはスケジュールからの遅れを取り戻すために危険を冒さなくてはならないようなシステムは、人間の作業者向けではないともいうことができる。もつとゆるやかなスケジュール設定にするか、あるいは時間的遅れを生まないような機械に作業を担当させるべきであろう。

また、時間に厳密に行動するということは、個人に固有のテンポから外れて行動することを強いる結果になる。自分の精神テン

ポと異なるテンポで作業することはストレスの原因になる。つまり、厳密な時間の設定のもとで作業することは、たいていの場合、ストレスの原因になることが予想できるのだ。

過度のストレスが健康的な生活を阻害することは、よく知られている。他者から自分のテンポに合わない生活のペースを押しつけられることで、過度なストレスが生じ、それが健康の阻害につながる可能性は否定できない。

人間の性格類型の一つに、時間に厳密であろうとする性格があることが知られている。いわゆる「タイプA」という性格である（念のためいっておくが、血液型のA型とは関係ない）。このタイプAは、循環器系の疾患の発生と有意な関係があることが指摘されている。時間に厳密であろうとする生活態度から生じるストレスが、循環器系のシステムをむしばんでいるのかもしれない。

時間に厳密に行動することは、単にストレスを強めるだけではない。そのようなペースでの行動を持続することは、そもそも難しいのである。

各人が固有の行動のテンポをもっている以上、たとえ強いられたテンポに従って作業をしようと試みたとしても、作業を持続している間に、やがては個人固有のテンポに近づくことになるだろう。このような理由から、強いられたテンポでの行動の持続は、失敗することがあり得ると想定すべきである。もし、そのような厳密な時間からのずれが大きな問題に発展する可能性があるとしたら、それは人間に合ったシステム設計とはいえないのだ。

私たちの周囲で様々な出来事が起こったとしても、それが私たちに認識されるまでには数十ミリ秒から数百ミリ秒かかる（つまり遅れが生じる）。私たちの知覚や認知が神経を介した物理的な伝達に基づく以上、どのように進化したとしても、このような遅れがなくなることはないだろう。

ふだん、このような知覚認知の遅れが自覚されることはほとんどない。この遅れが進化の過程で獲得された人間の特性であることを考えると、それは地上の環境における行動では、意識する必要のない程度まで短縮された結果なのだろう。

ただし、知覚認知処理の時間特性に基づく錯覚が、私たちの日常的判断において重要な結果をもたらしていることは無視できな

い。私たちが見たり聞いたりしている対象の時空間特性は、様々な要因で物理的に規定される時空的な特徴から乖離^{かいり}している。そもそも私たちが体験している対象の（特に動いている対象の）時空間的特徴は、物理的に規定されるそれからは、常にずれているのである。

こうした人間の時間的制約は、せいぜい走り回ったり、歩き回ったりするのが最速の移動であつたところからの進化の過程で、長い時間をかけて獲得されてきたものである。これまでの状況では、たとえば視覚の0・1秒という遅れが致命的な問題に発展するようなことはなかった。しかし、現在では歩いたり、走り回ったりする際の速度の何倍もの速さで移動することが可能になっている。0・1秒という遅れは、場合によっては、これまでになく致命的な問題に発展するかもしれない。

同時に知覚したり認識できる対象の数における制約も、自らの足を使つて走つていくような状況では大した問題ではないだろう。しかし、一瞬の間に生じたことの認識に数的な制約があるという人間の知覚認知過程における時間的限界は、時速40キロ以上の高速移動の際には、致命的な問題に発展する可能性が多分にある。

「百聞は一見にしかず」ということわざが示しているように、私たちはふだん、自分たちが見ているものを疑わない。物理的実在そのものを見ることができると思い込んでいる。このような見方は人間の能力の過大評価以外の何ものでもない。私たちは、自分たちの知覚や認知の過程に様々な制約があること、決して、ものそのものを見たり聞いたりしているわけではないこと、見えていくことを感じていることが常に正しいわけではないこと（むしろ、ちよつとしたきつかけで誤り得ることを知つておくべきなのだ）。

なお、情報通信や移動の高速化は、知覚や認知の遅れがもたらす危険性の拡大以外の問題も引き起こしているように、筆者には思われる。環境が高速化しても、私たちの神経的な伝達速度や知覚認知の処理時間は変化しないことから、人間が一時にできる認知的課題の数もそれほど変わらないことが推察される。このことは、様々な情報が手に入り、やりたいこと、したいこと、そして実際にできる可能性が高まつたとしても、実際にできる事柄の数がそれほど増えるわけではないことを示唆している。

高速化した現在においては、様々な情報が入り、移動も高速化されたことにより、潜在的に実現可能な事柄の数は増えたに違いない。やりたいことの中には、「どうしても実現したい」というものもあれば、「やらないよりはやったほうがまし」というレベルの

事柄も多く含まれていることだろう。

しかし、人間が一つのことをやり遂げるにはどうしても一定の時間がかかる。その時間が技術革新や経験、学習によって、増えた欲望を満たすのに必要な時間以上に短縮されないとしたらどうなるだろうか。当然、潜在的な可能性に基づいて肥大する欲望のうち、実際に満たされるものは一部のみということになる。この場合、やりたいこと、やれるはずのことは数多くあるのに、なかなかそれが実現できないジレンマが生じる。

そうなると、むしろ、できる事柄が少なかったころよりも時間が足りず、忙しく、やりたいことができないという感覚が強くなっているかもしれない。

同様の問題は、会社などにおける仕事についても指摘できる。「やらないよりはやったほうがよい」作業や会議などが増えたとしても、1日の長さが変わるわけではない。また、どんなに単純な作業であっても、その遂行にはある程度の時間が必要だ。

やらないよりはやったほうがよい仕事の数が少ないうちは何とか対応できるだろうが、その数がどんどん増えていくと、本当になすべき仕事にかけたい時間も削られることになってしまう。結果として、組織としての生産性は低下する。誰にとつても時間は有限であること、どんなに簡単な作業も一定の時間を必要とすることを考慮し、作業の優先順位に従って、効率的に時間という資源を使用することを心がけることが望ましい。

では、時間の均質化にはどのような問題があるのだろうか。人間の身体は時間的な有限性を持っている。いくらコンビニエンスストアが365日24時間ずっとオープンしているとしても、人間には睡眠などの休息が必要である。欲求のままに続き続けていることはできない。仮に、太陽の周期に関係なく起き続けているということができたとしても、それにより人間の心身は支障をきたし、健康な状態の維持が困難になることもあり得る。典型的な例として、睡眠障害がある。睡眠障害とは、睡眠に関わる様々な問題の総称である。

1日24時間という生活の周期で起床、活動、睡眠のリズムを調整している、いわゆる体内時計にずれが生じると、「朝になって

も起きることができない」「昼間に急に眠くなる」「夜いつまで経っても眠ることができない」「寝ている途中で急に目が覚める」といった問題が生じやすくなる。このような状態に陥ってしまうこと自体、当人にはきわめて苦痛である。

さらに、睡眠障害は、様々な事故の原因にもなっていると指摘されている。睡眠障害に陥った場合、昼間の活動時に緊張が失われたり、場合によっては突然作業中に眠り込んでしまう。

電車の運転士が運転中に居眠りをしてしまい、止まるべきホームを通過してしまったという新聞記事を目にしたことがあるだろう。こうしたケースでは、運転士が「睡眠時無呼吸症候群」であったことが後に指摘されることがある。この睡眠時無呼吸症候群も、睡眠障害の一つである。睡眠中に気道が閉じられることによって呼吸が停止し、睡眠が途切れ途切れになってしまう状況を指している。この状態にある人は、結果として、睡眠不足に陥ることがある。中年以上であれば約4パーセントがこの状態にあることが指摘されている。

睡眠不足は、旧ソ連のチェルノブイリ^{注一}の原発事故や米スペースシャトル・チャレンジャー^{注二}の事故にも関わっていたといわれている。現代のように巨大なプラントや機械を操作するような文明においては、睡眠障害の問題は決して個人にとどまらない。

睡眠障害は昼間の活動における失敗を引き起こすだけではない。睡眠障害の問題は決して個人にとどまらない。睡眠障害を放っておくと、うつのかげになり得るともいわれている。生活パターンの乱れが、睡眠障害、うつと進行していく可能性があるということである。

睡眠障害によって、身体的にも問題が生じることが知られている。睡眠時間が極端に短いと、身体的代謝の異常（いわゆるメタボリックシンドローム）により、肥満や高血圧、動脈硬化を引き起こしやすくなることが知られている。

このように、朝起きて、昼活動し、夜眠るというリズムを離れた生活パターンには、作業における集中力の低下を引き起こしたり、精神や身体の健康に支障をきたしかねない危険性が潜んでいる。人間の欲望が、絶え間ない活動を欲したとしても、人間の身体はそれに応えることができないのだ。

朝、昼、晩をいっさい考慮せずに生活しても、苦にならない人もいるだろう。しかし、そのような生活には、人間自身の心身の時間的制約がある以上、睡眠障害やそこから発展するうつや身体的な代謝の異常など、重大な問題を引き起こす可能性があるとい

うことを、十分に認識しておくべきだろう。

睡眠障害に陥った場合、光療法など、心身のサーカディアンリズムを1日の太陽の周期に合わせるような治療が有効であることが、しばしば報告されている。私たちの心身の健康にとって、日の出・日の入りのリズムと対応した生活パターンは、重要な意味をもっているのだ。

また、人間の欲求が時間を均一なものに変えようとしても、その欲望が基づいている身体は、様々な形で時間を分節化してしまう。身体的能力(たとえば運動能力や生殖能力)は、子供と大人とを、また青年と老年とを区別する。人間は誰でも年を取り、いつまでも生きることができない。これは、私たちに等しく課せられた絶対的な時間的制約であることを忘れてはならないだろう。

生活にとって、コンビニエンスストアのような24時間営業の店舗があることは、とても便利である。だが、逆にこのような店舗の存在によって、私たちの生活自体も変化していることに気づかされる。昼夜を問わずに買い物に足を運ぶ機会が増えてしまう。このような店がなかったころは、夜中に何かが必要になっても、翌日になって店が開くまで我慢しなければならなかった。一見便利そうではあるが、それは、夜中に行なう用件が生活の中に加わるという結果をも生み出している。

平成15年版の厚生労働白書によると、日本の子供の生活パターンは、だんだん夜型に移行している。その親にあたる世代の生活においても、同様に夜型への移行が進んでいるものと考えられる。そのような生活パターンの「夜型への移行」と呼応するように、日本中の多くの場所で24時間営業のコンビニエンスストアが増えている。

いつまでも変わりなく均質的な時間の続く状態とは、身体的制約を免れた、抽象化された理想的状态ではない。そのような時間を生きている存在とは「天上の存在」、身体的制約をもつ私たちには決して触れることのできない彼岸的存在といってもよいだろう。

私たち自身は時間的に有限であり、永遠に続く時間を生きているわけではない。時間を均一的なものとしてみようとする欲求は、もしかしたら、私たち自身の時間的制約(つまりは死)から目をそらそうとする根本的な自我防衛機制(もともと精神分析の用語で、不都合な事実の認知を避けたり、無意識的に抑圧したりすることによって、不快な感情を緩和して心的安定を得て自我を防

衛しようとする心の働き)に基づいているのかもしれない。

とはいえ、誰もが死から免れることはできない。おそらく、豊かな時間を得るためには、私たちはこの現実から時間を見直す必要があるのだろう。そこには周期的、季節的な時間と、一生のうちで一度しかない一期一会的な時間とが流れている。いつでもあり得るような均質化された「いま」ではなく、今しかあり得ない「いま」が常にあることになる。

時間を均質化し、特異点をなくしていく生活パターンが、この一期一会の時間性を見失わせることにつながっているとしたら、時間との対峙や生活設計において、方針を間違えることになってしまうかもしれない。また、本来は今しかないこのときを、いつもと同じ「いま」とみてしまうことによって、今しかできないことを見落とすことになってしまうかもしれない。

人間は、その身体的制約から、グローバル化された、均一で延々と続く時間を生きることは難しいといわざるを得ない。むしろ、どのように時間を分節化し、1日や1ヵ月、1年という期間を、意味のある時間にできるかが、身体的制約から離れることができる人間にとっては重要な問題となるだろう。

物理学的な時間には特定の方向性や特異点はない。しかし、人間にとっての時間には、不可逆的な方向性や、特定の意味をもつ時間帯やリズム、ペースがある。

繰り返しになるが、このことから分かるのは、時間に方向性や特別な時点をもち込むのは、時間そのものの物理的、概念的特性ではなく、むしろ人間自身の時間的制約のほうだということである。人間の心身の時間的特性が、時間の体験を通して時間に方向性や特異点をもち込んでいるということもできる。

たとえ物理学的な時間に特定の方向性や特異点がないとしても、人間にとっては、知覚認知過程における情報の伝達や処理過程、意思決定してから行動を引き起こす過程において、時間における方向性や順序、特異点の関与を避けることはできない。知覚認知や行動における体験は、一定の時間の中で展開せざるを得ないのだ。私たちは経験したことを保持し、それを過去に学んだこととして現在において参照できる。意思に基づく行動は、現在において未来の状態を目的として想定することになる。また、誕生してから死ぬまでという、不可逆的な方向性にしばられざるを得ない。

出典…一川誠『大人の時間はなぜ短いのか』 集英社 2008年

(ただし、本文の一部に改変および省略がある。出題者注を新たに付した。)

注一 1986年に旧ソビエト連邦のチェルノブイリで起きた原子力発電所事故

注二 1986年にアメリカ合衆国でスペースシャトル・チャレンジャー号が打ち上げ直後に爆発した事故

注三 おおむね24時間周期の生物リズムのこと

問一 傍線部アに関連して、人間の時間的制約とはどのようなことか、二〇〇字以内で説明しなさい。(配点五〇点)

問二 傍線部イに関連して、なぜ、自分たちの知覚や認知の過程に様々な制約があることを知っておくべきなのか、その理由を三〇〇字以内で説明しなさい。(配点五〇点)

問三 傍線部ウに関連して、睡眠障害はどのような問題をもたらすか、本文に即して三〇〇字以内で説明しなさい。(配点五〇点)

問四 本文における時間の均一化の特徴とその問題点を踏まえて、どのようにグローバル化が進む社会に対応していくことが望ましいといえるか、あなたの考えを六〇〇字以内で論じなさい。(配点一〇〇点)